

京都琵琶協会二月例会

二月一日(日)昼平井会長宅。久々の雨天ながら気温は九度という冬としては珍しい暖かさ...

緻水会(如月会)新春演奏会

二月八日(日)昼大阪市立北会館。如月会は緻水会の新進青年部が組織する会...

定例研究会

二月八日(日)昼東京新宿洲鳳会館。主催日本琵琶楽協会(有料)...

京都琵琶協会の活躍

梅原旭濤女士 一月八日京都ステーション

ソノホテルに於ける京都西山ロケットクラブの例会に招待を受け、堅田落を演奏...

ラジオ琵琶放送

一月二十九日(日)午後三時十分NHK・FM山崎旭濤女士「安宅」を放送。

山口速水(信吉)氏

一月二十四日逝去。享年七十八歳。現一水会本部副会長で、大正八年横田新水氏に師事し...

(予告)

京都琵琶協会三月例会 三月八日(日)午後

一時本部平井会長宅。三月十五日(日)夕五時東京上野本牧亭(有料)...

あがき 三月さくらの咲く時分：無論これは旧暦三月のこと...

昭和五十六年三月一日発行(非売品) 編集者 植村 稟 社水 発行所 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七三六(三六)〇六一番

要言 機関紙

京

絃

第三二二号 京絃社

建武の中興と吉野五十七年(九)



ばくす

北畠親房は、まづ筑波山の麓小田城に入城し、賊軍の包囲を受けて奮戦中...

ので、日本国は如何にして建設されたか、国の理想、本質は何か、建国二千年を通じてその基底に流れる精神は如何なるものかを説いた...

同後醍醐天皇の條 およそ王土にはらまれて、忠をいたし命を捨つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず...

後村上天皇の時代、一時賊の勢い盛んで吉野行宮を焼くに至ったが、朝廷側はこれに屈する事なく足利の誘惑を退け...

神皇正統記 中、後醍醐天皇の條には 神は人を安くするを本誓とす。天下の万民は皆神物なり。君は尊くましますと、一人を安んずるを苦しむる事は天も許さず...

次ぎに「職原抄」は、我が国の官職制度を記されたものであるが、それは当時の武士、大低官職を誇称したもので、たとえは楠木正行を攻めた賊軍の高師直は武蔵守、その弟師泰は越後守、そしてこれに参加する者、

甲斐守、駿河守、左京大夫、刑部大輔、判官等を称している。賊軍でさえこの通りだから武士という武士は皆官職を誇称した。調べてみれば是等一切の官職は天皇が授けるもので將軍といえども天皇に任命権があることが解



五絃閑話

水藤 五朗

鎮魂歌

一月二十四日、錦心流の山口速水師が逝かれた。三日後の二十七日午后、京成町屋の駅に近い光明寺で行なわれた葬儀に私も参列した。天候に恵まれたとは云え、寒風の強い日であった。それは丁度一年前の松田静水師の葬儀の日と同様であった。先頭薩摩の伊集院

牙城、山本鶴声、筑前の松岡旭岡と、長年斯界に活躍した各師を失って、一段と寂しさを増した矢先であった。

吟亮、水藤枝水、大館洲楓、新部桜水、山元旭錦、鈴木鉦次郎、浅野晴風……と、その師名は限りがない。そして、その葬儀では琵琶のテープがスピーカから流れた。それは人生を琵琶に打込んだ故人への鎮魂歌となつたのであるが、参席して聴く我々にとっては、二度とその至芸に接することが出来ないと思ふ口惜しさや悲しさが先に立って、一入感慨深いものとなり涙が涌くことしばしばであった。速水師の演奏テープ川中島と城山がスピーカから聞こえる中、多くの絃友が師の霊前に合掌した。その演奏テープは、かつての師絶頂期のものではなく、時折に衰えをも感じられる部分のある、晩年のそれであるように私は思った。そしてこれは、葬儀と云う人生別離の場には自然なものであった。何故なら、もし、往年の強く、或る意味では舞台効果を狙つたハタタリ部分の多い演奏が流れたならば、あゝ元氣な時もあったなあ// と思う一方、近頃はあゝではなかつたよ、大分衰えた演奏だつたよ……と会話をしたであろう。

巧拙とは別のことである。この意味で、葬儀に流すべき演奏テープを生ある中から心がける弾奏家が在つてもよいであろう。立派な写真を作つて、将来これを葬式に使用せるのだ//と冗談を云う人がいる。そしてこれが事実になることもある。が、葬式にこれを是非使つて皆にきいてもらつてくれと云う人は少ない。いやあるのかも知れないが、何れにせよ芸に対する自信と責任がなければこれは云えないであろう。更に云えば、墓石と同様に縁起でもないことなのかも知れない。しかし、自己なきあとの葬式、法事等の折々に、無遠慮にかけられるにちがいない演奏テープについては、やはり相當の注意をしておいた方がよいであろう。子供や親族が、又、遺弟一門が、自分の氣に入つたテープを流してくれるとは限らないのである。むしろそうでない時が多いのかも。

十二月中旬、NHKの邦楽鑑賞会で長唄二題の特集があつた。それは吉住慈恭の「助六」と、芳村伊十郎「まかしよ」であつた。両師とも近世邦楽の名人である。慈恭師と伊十郎師を比較することは出来ない。それは相撲界に於いて、双葉山と大鵬を比べることと同様、現実性がないことである。ましてや芸の味は個人々々のものであつて、相対するものではない。が、この日、慈恭師の演奏として紹介されたレコードは師八十二歳の時のものであつて、残念乍ら芸術としては価値の低いものであつた。老境の味とか佗びと云う以前の問

題があつた。即ち、師の唄が三味線から少しはずれた音程となつて、いわゆる調子外れの感を聴き手に抱かせてしまふのであつた。名人として尊ばれるべき師の演奏としては、決して紹介するに足る内容でない。が、それが全集レコードとして発売され、放送される。八十二歳の演奏それ自体は今日それ程驚く事ではない。琵琶人の中でも、かなりの人々が立派な演奏をする。が、慈恭師の場合、八十歳歳の演奏は、往年のものに比べると全く芸術的に低くなつてしまつてゐる現実がある。そこには体力的な問題があつたのであろうが、師の天寿は九十二才であつたことを考えると、八十二歳そのものはまだまだ余命を残している頃と考えられる。だが、名人芸の所持者としての寿命は、それ以前に終つていたと想ふそのことを考慮して放送と云ふ公の場での演奏が、レコードが披露されなければならぬのであろう。

これに対して伊十郎師のレコードは、師が活動期のものであるだけに、師没後八年を経た今日でも、生々しい演奏であつた。この二つの演奏に接する人の中に、邦楽の初学者がいたとしたら、慈恭師よりも伊十郎師を上位の人と錯覚してしまうであろう。双葉山より大鵬が強いのだと思うように。今日、レコード、テープが芸術を自己の意思とは無関係に保存する。それ故に芸を保存されることによくよく注意をして、琵琶の音を永く後世に伝えてゆきたいものである。



徒然草 (つれづれぐさ)

- 鎌倉時代の随筆集(二二三一)元弘元年。作者吉田兼好。○自然、人事百般にわたる。○実生活に於ける感想趣味について。○一篇を貫く思想は仏教の無常観である。○「枕草子」とともに随筆好一対。

第七十段

元応の清暑堂の御遊に、玄上(げんじょう)は失せにし頃、菊亭の大臣(おとど)、牧馬(ぼくば)を弾じ給ひけるに、座に着きて、先づ、柱(ちゆう)を探られたりければ、一つ落ちにけり。御饌に饂飩(そくひ)を持ち給ひたるにて附けられにければ、神供(しんぐ)の参る程によく乾(ひ)て、事故(ことゆえ)無かりけり。如何なる意趣ありけむ。物見ける衣被(きぬかづき)の寄りて、放ちてもとのやうに置きたりけるとぞ。

(注) ○元応―後醍醐天皇の最初の年号。○玄上―宮中の宝物の一なりし琵琶名。○牧馬―全じ。

壇の浦

志賀 一



- 大臣―藤原兼季、右大臣、庭に菊花を多く培う。○柱―琵琶では「ちゆう」。○饂飩―飯にて作りたる糊。○きぬかづき―衣被きたるもの、即ち女なり。

感想(1) 饂飩を用意して居たこと。(2) 先づ柱をあらためたこと。(3) 物に動ぜず平然と琵琶を弾いて行く。(4) 落ちない前にそれだけ注意しておく。(鴨水記) 平家は権力の座につくと、貴族社界にあらがれて折角の活力を失つてしまつた。一の谷、屋島と戦に負け、遂に壇の浦で滅亡する。平家一同が亡びた三月二十四日は、今の五月二日にあたる。壇の浦のある関門海峡は、本州と九州を隔てて瀬戸内海の響灘と玄海灘を結ぶ。この狭い海峡を潮は西から東へ(外海から内海へ)と走り抜け、数時間後には、今度は反対に東から西へ流れる。こうして潮の干満により一

日に四回変わる。元暦二年(一一八五)三月二十四日、平宗盛を総大将とする平家と、源義経の率いる源氏の軍勢が壇の浦附近の海上で対峙した。戦は半日に及んだ。最初は平家方が優勢だったが結局源氏の大勝利となり、平家方は戦死、捕虜、或いは入水して果てた。八才の安德幼帝も二位の尼に抱かれて海の藻くずとなられた。

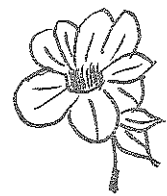
何が勝敗を決したのか。歴史書でも文学に於ても『潮流説』がほぼ定説である。合戦当日、潮はまづ東へ向って最高時速約十五キロの早さで流れ、次ぎに西へ同じ速度で流れを変えた。現在でも力の弱い舟は逆上るのを禁止されるほどの早さである。

平家軍は海峡の西寄りに陣を敷いていたから、初め東への急流に乗って攻めた。『平家物語』にも「壇の浦はみなぎり落つる潮なれば、源氏の舟は心ならず潮に向いて押し落とさる。平家の舟は潮に追うてぞ出て来た」と書かれている。しかし潮の流れが変って西へ急速に流れはじめると、東側の源氏方が有利となった。潮を利用して猛攻を重ね、遂に平家一門を滅亡せしめた。

ところが一昨年、これを否定する新説が紹介された。流速十五キロは誤りで、海上保安庁のデータなどで、当日は最高でも四キロ以下の緩流であった。潮の流れが平家の運命を変えたとは考えられぬ。では勝敗の原因は何か。それは源氏方の奇襲である。義経は平

家の舟の漕ぎ手やかじ取りを弓で射る策に出た。『エンジン』を失った平家方は源氏のなすがままになってしまった、というのである。源平の兵船の比ははつきりしないが、8対5程度で源氏優勢であったらしい。兵力の差が大低の場合勝敗を決する。しかし、これでは現実すぎてロマンに乏しく、物語にはなりにくいと思われる。

下関市壇の浦町に、平家の末孫と称する漁師の集落がある。舟をあやつり海峡で魚の本釣りをしているが、この人たちは舟の中で決してあぐらをかかず、正座して釣糸をあやつる。あぐらをかいては同じ舟で亡びた先祖に申訳がたためからだという。



詩謡 石童丸

鈴谷 六水 編

西訪東尋父不得 夕陽山沈已蒼然

(西を訪づれ東を尋ねて父を得ず 夕陽山に沈み已に蒼然)

ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば

父かと思ふ 母かと思ふ

無明橋畔僧侶遇 右手花桶左

(無明の橋畔僧侶に遇う 右手に花桶左に珠数)



詩吟・和歌朗詠考(六)

編 集 部

(琵琶歌一裏見)

棄児行 雲井龍雄  
斯身飢斯兒不有 期児不棄斯身飢  
捨是邪不捨非邪 人間恩愛斯心迷  
哀愛不禁無情涙 復弄児顔多苦思  
児兮無命伴黄泉 児兮有命斯心知

見上げ見下す顔と顔 石童丸の振袖と法衣の袖ともつれ合い 離れ難く見上げるは深き縁のあるならん

感懐肩撫情殊深 此僧或我父成

純袖語無限思 道心聴之肺腑袂

(感) 感懐肩を撫で情殊に深し 此僧或いは我が父ならんか 袖に縫って語る無限の思いを 道心之を聴きて肺腑袂

十年に余る修業にて 生者必滅会者定離

本来空の理りを 悟りながらも恩愛の

情には脆きものなるか

忽聴暮鐘無情響 杜鵑一声血飛啼

(忽ち聴く暮鐘無常の響き 杜鵑一声血に啼いて飛ぶ)

(演奏八分)



琵琶歌中の

焦心類属良家教 欲去不忍別離悲

橋畔忽驚行人語 残月一声杜鵑啼

斯身(このみ) 飢ゆれば斯兒(このこ) 育たず 斯兒棄てざれば斯身飢ゆ 捨つるが是(ぜ) か捨てざるが非(ひ) か 人間の恩愛斯(この心)に迷う 哀愛(あゐあい) 禁ぜず無常の涙 復(ま) た児顔(じがん) を弄して苦思(くし) 多し 児(じ) や命無くんば黄泉(こうせん) に伴わん 児や命あらば斯(こ) の心知れよ 焦心(しょうしん) 類(しき) りに属す良家の救いを 去らんと欲して忍びず別離の悲しみ 橋畔(きょうはん) (きょうはん) 忽ち驚く行人の語らい 残月(ざんげつ) 一声(いっせい) 杜鵑(とくせん) 啼く。

(作者は羽前の人で勤皇家、明治三年十二月小塚原で刑死、齢二十七。)

「斯身」 雲井龍雄自身。「無命」 此のまま命なく捨う人が無ければ。「黄泉」 死んでゆく地下、地下は黄色の水が流れる。「斯心」 自分の子を捨てることの苦しい親心。「焦」 焦あせること。「属」 類属。「杜鵑」 杜鵑とよむ。

「大意」 我が身が飢ゆればこの子は育たぬ、思い切つてこの子を捨てなければ自分の生を保つてゆくことが出来ぬ、捨てるのが良いか捨てるのが良いか、人間の恩愛としてどうすれば良いかわからぬ、可愛さが一杯でなげ捨てるなどという無情なことをするか涙が溢れ出る、幾度も我が子の顔を撫でながら苦

しい思いになやむ、このまま捨う人もなく命が無いものならば一所にあの世へ連れて行こう、若し命があつて育つたときは苦しい親の心を察して恨まないで欲しい、時も迫り心のあせり、どうぞ良い人に拾われるよう切に願いながら、去ろうとしては又忍び寄り、別れる無限の悲しみに泣く。橋の辺りから人の来る気配に意を決して走り去った。残月淋しくほととぎすの啼き声が聞こえる。

(訂正) 前号「本能寺」の作者山陽の第三子は頼春水の子の誤植、また安政六年以下取消し。右お詫訂正します。



函館・五稜郭 土方歳三の最期

辻 旭 城

嘉永六年(一八五三)、アメリカの提督ペリーが突如浦賀に來航した。これを契機として鎖国を解き、通商貿易がはじまった。しかし、これは幕府を窮地に追いこむこととなった。貿易により経済的危機がもたらされ、これを機会に反幕府勢力が強くなったからである。この勢力が次第に優勢となり、明治元年(一八六八)幕府は遂に倒れた。

青函連絡船で函館に着く。船からおりて頭を浮かぶのが、港近くにある五稜郭である。

尊王攘夷をめぐる幕府内乱のさなか、明治維新の戊辰戦争最後の舞台となった地である。そのあと新撰組の土方歳三がこの函館戦で戦死を遂げた。彼は死ぬまで組則を守り意志強く、最後まで降伏しなかった。そしてよき死場所を求めて戦っていたという。

五稜郭は、江戸幕府が北方防備の目的で築城した日本最初の洋式城郭である。蘭学者武田斐三郎苦心設計の星型の城塞で、榎本武揚ら旧幕府軍が新国家「蝦夷共和国」を、たとえ如何なる形であれ樹立した。総裁榎本武揚副総裁には陸、海軍奉行などの役職を入札(投票)によって定め、土方歳三は陸軍奉行並みに選ばれた。

しかし、新撰組の副長として活躍していた土方にとつては、この度の新国家建設による、陸軍奉行並みに任せられた栄職よりも、ひたすら最後まで戦うことしか念頭になかった。事実彼は幕末の乱世を戦うことのみで懸命に生きてきた、徹底した戦の職人であった。土方は生涯を通じて新撰組のたった一人の忠義者であった。

元治元年(一八六四)京都では池田屋騒動に禁門(蛤御門)の変が起こった。これを契機に一躍その名をとどろかせたのが新撰組で、徳川幕府を護る浪士の集団であった。総長近藤勇、副長が土方歳三で、郷里は同じ武州多摩の農村出身、二人は常に水魚の交をして活躍を続けていた。新撰組の発展は、近藤、土方があつたからである。

京都での活躍も束の間、歳月は流れ情勢は変った。明治元年正月の、鳥羽・伏見の戦で幕府軍は薩長軍に敗れ、新撰組の志士達は流浪の道を通る。江戸に戻った組員は僅かに四十四人という淋しきで、新たに同志を募ったが応募者はなく、取りあえず残りの組員を中心に甲陽鎮撫隊を組織し、再挙を計るべく甲州路へ向った。そして官軍と激戦の末破れて逃走した。近藤と土方は下総の国流山で再起を企てたが、近藤は官軍に捕縛され、江戸板橋宿で斬首刑に処せられた。

近藤を失った土方は江戸を脱出し、大鳥圭介ら旧幕府方と合流して宇都宮、金津と転戦、仙台から榎本武揚ら旧幕府軍艦隊と共に、はるばる蝦夷地へ渡った。そこに五稜郭での激戦が待っていたのである。

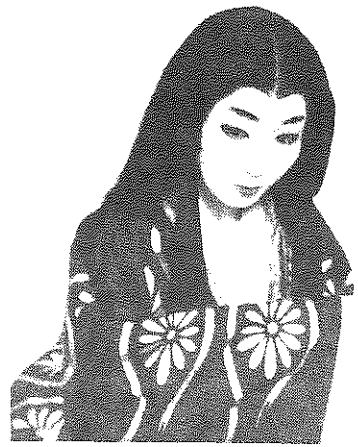
明治二年四月、官軍は破竹の勢いで五稜郭に進駐し、甲陽鎮撫隊を壊滅すべく函館を避けて乙部から上陸した。江差から三隊に分かれて函館への進撃で、一隊は松前から、二隊は本古内、三隊は中山峠の二股から、二隊は中山峠二股口を嚴重な守備体制下のもとに戦線を引いていたが、上陸した官軍は兵力と弾薬に物を云わせ、昼夜を分かたず猛攻、これにも屈せず美事な戦いぶりであった。これは土方の意表をついた軍略が奏功したという。しかし、土方の指揮する戦いの殆どが勝っているのに、何れも幕軍の勝利にはつながらなかった。

五月の初め土方部隊が五稜郭に戻った時は、苦戦続きで追いつめられ、降伏は時間の問題となっていた。落城を前にした五月十一日の未明、官軍は海陸からの総攻撃を開始、観念した土方は死に華を咲かせるべく五稜郭を出発した。二千数百の官軍に、こちらは僅かに五十余人で到底叶わず、官軍の放つ一弾は馬上の土方歳三の腹を貫通し、無念にも落馬して壮烈な戦死を遂げ、幕軍は降伏して終戦となったのである。



上原まり(柴田旭艶)嬢  
宝塚退団

宝塚歌劇団は三十日、トップ娘役の上原まり(専科)が本年四月限りで退団すると発表された。一二月宝塚大劇場、四月東京宝塚劇場で上演する榎名由梨主演の「新源氏物語」で藤壺を演じるのが最後となる。退団の理由は筑前琵琶界の重鎮である母・柴田旭堂の跡を継ぐ準備。宝塚きつこの演技派娘役で歌でも活躍した。四十三年初舞台。花組育ちで昨秋から専科へ移った。この間、四十六年「小さな花がひらいた」で甲にしきの相手役に抜てきされたのをはじめ「あかねさす紫の花」では榎名由梨等男役六人の相手をつとめて見



事成功したのは宝塚史上珍しい記録で彼女の實力を示している。(朝日新聞から転載)  
(写真は藤壺に扮した旭艶嬢)  
尚母堂柴田旭堂女史は一月八日ラヂオ毎日で旭艶嬢と琵琶対談放送、同十九日高槻市民会館ホールで「二〇三高地」を、同二十一日吉屋ルナ・ホールで洋楽演奏の会に琵琶を組入れた新規軸の企画で「那須与市」を、二月一日サンケイホールで家元志賀山師の立方で「玉藻の前」を演奏するなど盛んに活躍中である。

寸言(46)  
木曾義仲 平家を西海に追い京都に  
入り後に義経に敗れて近江粟津が原で戦死。源義仲は幼少から木曾の山中で育ったのでこの名が通称となった。

京都琵琶協会の総会・新年宴会

一月十一日(日)午後一時から一月例会を兼ねて平井会長宅に平井春嶺、水内燦水、桜井旭雷、荒木旭媛、牧南水、山岡旭清、安住旭康、矢吹旭美津、梅原旭壽、楊嶽水夫妻、林旭康、馬場鴨水、植村寛水各会員並びに伊達画伯来賓出席。総会開催①昨年度事業、会計報告、②役員改選(全員留任)③会長平井、理事へ総務、同牧へ会計、同梅原、同矢吹、監事植村、④本年度事業計画の一として京都琵琶協会を対外的に強力なものにする手段方法に就て会長から抱負の説明があり、これに対して各会員から具体的な意見が陳述され、早速運動に着手する。次に春の演奏会を四月二十九日(天皇誕生日)東山安井金比羅会館で開催。その他の件を全員承認のあと研修演奏開始、楊夫人の「重衡」を序奏に数氏の熱演を終り、会場を金閣寺附近の料亭錦鶴に移して京料理で乾盃、あとは飲むほどに酔うほどに無礼講の盛宴で琵琶より上手な隠し芸演出和氣囃々裡に八時過ぎ散会した。  
(欠席者)木下皇水、田中敷水、戸倉旭嶺、戸田旭公、林田旭城。

大阪琵琶同好会の総会・新年宴会

一月十日(土)正午奈良県保養センター。五十五年度事業報告、会計報告、役員改選(全員留任)。新年宴会に続いて演奏に移り赤垣源藏、安光、川中島、森野、城山、米田、常陸丸、多和、湖水波、川村、白虎隊、坂根旭嶺、松の廊下、矢野旭信、扇の的、島津旭都、小栗栖、辻旭城、菊水の旗、西村旭瑞、本能寺、豊島旭明、安宅の関、作花旭友、姫百合の塔、石橋旭嶺、二〇三高地、奥村旭美、羅生門、田中敷水、堅田落、天津八千代、五時

散会。

初春琵琶謡い初め

一月十一日(日)屋鶴岡松柏会館、主催鶴岡琵琶友の会。昨秋の一水会全国大会で優秀賞受賞の鶴岡支部長辻有水氏の祝賀を兼ねた催しで、屋島の誉、結城秀山、鉢の木、市川秀清、良寛、蓮井裕水、霧の川中島、旅河佑水、菅公、本間寛水、本能寺、須藤政水、竜の口、田中盟水、八甲田山、辻有水。以上演奏後懇親宴を開き盛會裡に散会した。

日本芸術琵琶普修会一月例会

一月十八日(日)屋東京文京区大塚の貸席京屋で開催。門外漢外弾法、錦幽、本能寺、内田隆章、白虎隊、杉山富士子、菅公、日比静子、北の庄、丸田旭琴、河内の宿、鈴木好水、石田三成、佐藤旭尚、伊豆の御難、山崎錦幽、天の羽衣、金森旭輝、羅生門、坂入晴峰、花の白虎隊、長谷川錦舟、康頼悲願、鈴木流泉、堅田落、若宮旭登。以上演奏のあと新年の小宴に移り七時散会した。

日本琵琶楽協会の総会

一月二十二日(日)東京豊島区高三会館。昨年度事業報告、収支決算報告、本年度事業計画、同予算審議、役員改選、その他、終って新年懇親宴に移り五時半散会。

琵琶楽名流大会

一月二十四日(土)正午東京銀座座カスホール、東京新聞・日本琵琶楽協会共催(有料)。月下の陣、佐々木徳紅、八甲田山、田中彩水、扇の的、吉永松陽、西郷隆盛、内田旭章、滝口入道、中村鶴翔、井伊大老、網野桜苑、羅生門、渡辺旭寂、板倉旭富、絃青木旭洲、若

名古屋秋声会の新年集會

一月二十五日(日)名古屋中小企業会館五階和室に於て開催。会員の外西川磯水、楊嶽水、丹野鯨水、同門人二人、谷津壯水の諸氏列席。因船、山本澄子、会津稚子桜、水野紅恵、忠度、土山紅美、重衡、近藤紅貴、月下の陣、若森紅葉、菅公、田端紅玲、白虎隊、若森紅葉、花紅葉、近藤隆盛、菅公、小沢堅良、母常盤、鬼頭紅春、西郷隆盛、土川蒼水、菅公、糸井慈水、川中島、松浦秋翠、湖水乗切、長谷川秋楓、花売翁、牧秋声、月下の陣、丹野鯨水、扇の的、楊嶽水、湖水乗切、谷津壯水、安宅、西川磯水、花紅葉、前田秋声。続いて宴會に移り隠し芸など演出して八時過ぎ目度く散会した。

昇伝披露・喜寿祝琵琶演奏會

一月二十五日(日)屋酒田市山王クラブ、一水会酒田支部。酒田琵琶愛好会共催。金剛石、一同、因船、高見亜紀、春日野、山田祐、吉野山懐古、山本笙水、測上蘭水、桜狩、佐藤、河内の宿、高見、蓬萊山、尾形、狩野の雨、佐藤、紅葉狩、今井紫水、鉢の木、佐々木、水、西村佳水、城山、三沢松水、八甲田山、辻有水、肩をもむ、荒井藍水、茨木、佐藤、烈水。外に詩吟、扇舞各一題。